

あるフルブライターの個人的事情―Aさんのこと

梅谷 俊 一 郎

一九六二年、私は日産自動車に就職した。プレス工場での一ヶ月の現場実習の後配属されたのが総務部調査課であった。そこで私ははじめてAさんに会った。当時本社は、新子安の埋め立て地にあつて、工場と同じ敷地にあつた。周囲は工場ばかり、緑は全くなく、排煙も排出し放題という時代だった。すべてが灰色というのがこの地域の印象であつた。

余談だが、かつて建築家アントニン・レイモンド夫妻と偶然に近づきになり、自宅にお茶によべたことがあつた。ちょうど彼は北九州の八幡製鉄所にレクリエーション施設を完成させた頃だった。この灰色の街で、その時の彼のコメントが思い出された。曰く、北九州というところは年中煙で曇っていてすべてが赤茶けている。だから、自分が請け負ったレクリエーション施設には、極彩色の色を施した。でないとなんか人間の心はすさんでしまうから。

総務部調査課

新子安に毎朝通うようになって、このコメントを自分自身実感した。当時の調査課は、課長以下一六〇七人のスタッフで構成されていた。ほとんどが中高年者で、何となく沈滞した雰囲気であつた。それもそのはず、それまでの調査課は休職明けの人、何かでしくじつて謹慎中の人といった連中のたまり場と考えられていたのである。時代は動き、自由化に向けて業界が何となく騒然としてくるにつれて、調査課にもそれなりの仕事が生まれてきた頃であつた。そこへ新入社員の私が「戦力」として配属されたという次第であつた。この年、Aさんは一年間の病気休職から復職して来たところだった。私に与えられた仕事は、業界再編成を見越して、競合する他社の財務分析であつた。Aさんが統括、經理のヴェテランIさん、その補佐が私という陣容であつた。

組合の姿勢

入社早々、一週間ほどのオリエンテーションがあつた。この年、一九六二年の大卒新採用は技術屋が六十人、事務屋が四十人、計百人であつた。各部の部長が来て、担当部署の仕事について話す。その最後に日産労組組合長、塩路一郎が同じく話に来た。その日このクラスで起こったことはDavid Halberstam. *The Reckoning.* に譲る。^{*1} とにかく天皇とあだ名された実力者であり、会社のトップにもいろいろな意味で影響力を持っていた人物と私は衝突したのだ。塩路がどのような人物か、全く知らなかった。塩路が労使協調をことさら強調して、組合員の利害が二義的な問題であるかのような口調に、私としては納得がいかなかったのだ。当然私の質問は、組合の姿勢が根本的におかしいのではないかという口調になる。このことが塩路を激怒させたのだ。入社早々こうして衝突した相手が



帯広マディソン交流レセプションにて
2016.5.11

どのような人物かが次第にわかってみると、結局、会社と組合が一体となって、労働者に対してインチキをしているという構図が見えてきた。塩路は昇給や労働条件の向上を迫る労働者、かつて百日のストを敢行した労働者たちを抑える。その見返りに塩路は経営への発言力と金銭的・非金銭的報酬を受け取るというわけだ。私の嫌悪感は組合だけではなく会社の卑劣さにも向けられた。

そのような気持ちを決定づけたあの朝の光景は忘れられない。ある日の出勤途上、新子安の駅をでて踏切をわたったあたりで、人だかりができて何やら騒がしい。どうやら若い工員を数人の背広姿の男たちが取り囲んでもめている。若い工員がビラ配りをしようとするのを、男たちが阻止しようとしているらしかった。スクラムを組んで若い工員を壁際に押し付けようとしている連中の中に、見覚えのある顔を見つけた。同期かせいぜい一〜二年先輩の男だ。大学教育を受けていながら工員のビラ配りに実力行使、それも自発的にそのような行動にでるとは・・・そんなにまでしなくては会社は務まらないのか。その連中の姿が限りなく浅ましく思えた。何としてもこのボロ・インチキ会社を辞めてやろうと、この時固く決心した。

フルブライト留学生試験

しかし、考えてみると恒産はなし、住む家もなく六畳・三畳のアパート暮らし、それに半身不随の母を抱えて、家賃を払うと月給は半分しか残らない・・・そんな境遇で会社を辞めるとはどうか考える、先は全くの暗黒。ましてや終身雇用が当たり前の時代、考えれば考えるほど悲觀的にならざるをえない。会社を辞めるにせよ、そのあとはどうする？どこにどんな仕事があるというのか。会社を替わっても組織と個人の関係に本質的な違いはない。個人として容認しえないことも企業のためにはせざるをえないのか。このまま会社に留まっては自分の意志や主義は圧殺されて、むしろその正反対のことすら自らすんでしなくては生きていけないのか。会社に見切りをつけるなら、自由のある職場を目指さねば日産をやめる意味はない。自由のある職場、それは大学か研究所のようなところ以外には考えられない。しかし、学部ではまともな勉強はしていないとなると、大学院で勉強しなおす必要がある。そんなときふと思いついたのが、学生時代アルバイトでやっていた観光ガイドの客の中で、留学してもっと勉強しないかと言ってくれた Herman Marx 氏のことだった。会社をやめて日本で進学することは財政的に到底不可能である。留学する以外には途はないが、自費留学など論外だ。全額給費の留学はフルブライト奨学金が唯一の可能性である。こうして私はフルブライト留学生試験に挑戦することになった。毎年奨学金を与えられるのは四・五名、競争は激しい。一年目は英語のテストは合格するも、書類選考でふるい落とされてしまった。そこで二年目の挑戦。今回は英語、面接と乗り切って、いよいよ当時新橋にあったフルブライト委員会に合格発表を見に行った。結果は補欠。目の前が真っ暗になって、その場に座り込んでしまいたい衝動に襲われた。フルブライト委員会の言い分は、私は企業人で、帰国後は会社にとってもなにがしかのプラスがあるのだから、費用は会社に負担してもらってはどうか。乏しい資金は大学の若手研究者に回したい云々。これで万事休す。残った可能性は何か。フルブライト委員会としては

アメリカの大学で奨学金やフェロシップをさがす手助けをしてくれるとのこと。めでたく財政的援助が得られた場合には、フルブライト・スカラーとして往復の旅費はアメリカ政府が負担することのこと。

ウイスコンシン大学へ

神の助けか、たまたま訪ねた川田寿教授（慶応大）の研究室で Professor Gerald Somers (University of Wisconsin-Madison) に会った。彼は日本語のわかる助手を探していたのでこれに応募して、彼の Research Assistant になった。ハーファタイム月給三百ドル、同時に大学院のフルタイム学生、授業料免除という待遇はフルブライト全額給費生の月一五〇ドルより良い条件であった。Institute of International Education からの書類によると留学初年度には雑費として八百ドルほど持参するのが望ましいとあった。Herman Marx 氏に相談したところ、すぐに八百ドルの小切手の入った返事が届き、「この金は貴君が勉強のために使うのが最も有効な使い道だから活用してほしい。返済の必要はない」とあった。その他留学準備としては背広一着が必要と思い、これはやはりガイドのお客 Ralph Teetor 夫妻の世話になった。かくてめでたく留学が実現したのであった。会社との関係は留学休職ということにした。私としては Ph.D. を取得して、自由のある仕事に転職するのが将来計画であったが、アメリカの大学で学位をとるのは容易ではないと聞いていたので、万一計画が不首尾に終わった時の安全弁として会社に還る途を残したのである。その結果、留学中給与が六十%支給されることになった。これは母の生活費である。

いよいよ留学が現実のものとなるに及んでこのことを A さんにも報告したところ、「ちょっと来い」と夕方焼き鳥屋に連れていかれ、開口一番、「どこへ行って何をしても良いがいずれば帰ってこい、十年たてば仕事をする気になる」と言われた。彼には私の将来計画はお見通しだったのだ。職場でうたた寝をしては T 課長に叱られたりして、およそ仕事に熱のはいらない私の心を彼は読んでいたのである。

一年ほど Master of Science を取得した。「学位は MA と MS とどちらがよいか」と Somers に聞かれて MS を選んだのだった。この段階で正式に Ph.D. を目指すことにして会社へは退職願を送った。T 課長からは慰留の手紙が来た。再度決心のほどを書き送った処案外あっさり OK が来た。かくて A さんに念を押されていたにもかかわらず、彼には何の挨拶もなしに私は彼の前から姿を消したのである。

A さんの再会

時は流れて五十年の月日がたったが、このことは永く私の胸に重いものとしてわだかまっていた。二〇一五年正月、思い切って A さんに手紙*₂を出した。残された時間はなあと感じたからだ。こうしてまさに五十年目に A さんに対面することになった。国際文化会館で妻 K 同伴、昼食に付き合っていた。この時の話から A さんが私をぜひとも呼び戻すようにと T 課長に強く進言したことを知った。T さんの意見は「梅谷には広い世界に活躍の場があるうから無理に引き戻すことはなからう」というものであったそうだ。黙って彼の意を無視したことについては「あのころ皆同じことを考えたのだが、君だけが勇氣

をもっていたのだよ」と言われていささか気持ちが悪くなったように感じた。

Aさんは日産にとどまって法務部長、常務取締役などを務め「日産の知恵袋」の名をほし
いままにした。ところがお会いしたとき「実は先月間違ってこの日にここへ来たのだよ」
とのことだった。カミソリのように切れる頭脳にしてこのことあるか！

* 1 Halberstam, David. The Reckoning. William Morrow & Co., 1986. Pp. 404-406. (ハ
ルバースタム、デイヴィッド・高橋伯夫訳 覇者の驕り・下 新潮社、平成2年 Pp. 36-39)

* 2

A様

冠省

この永い無音の後に何と始めたものか困惑しています。一方ではこの数年お便りをした
いと言う気持ちは次第に強くなりました。

随分旧いことになりましたが、私が留学したいと申しましたら、「どこへ行つて何をして
もよい。しかしいずれは帰って来い」と一杯飲み屋でAさんに念を押されたことはずっと
思いつづけていました。それにもかかわらず何の挨拶もなしに消えてしまったことが今で
も心に重く沈んでいます。そのようなわけでなかなか気楽にお便りできませんでした。反
面、すべてが終わった今ゆっくりお話ししたいと言う気持ちが年々強くなり、意を決して
ここにご連絡することにしました。

妻Kと人形町の末広に連れて行っていただいて寿司をごちそうになったそのお返しがい
たいと考えています。Aさんの現在の消息を全く持ち合わせていないのですが、可能なら
いづれご都合のよい日時に都内でも食事に付き合っていたらとこんなうれしいこと
はありません。

私は一九九九年大学を定年退職した後旭川の郊外、森の中に移住して既に十五年になり
ます。八十歳を目前にして比較的元気にはしておりますが、何かにつけて残り時間が少な
くなりつつあることを意識しています。近況などお知らせいただけると大変ありがたく存
じます。二〇一五年がご一家にとり良い年となりますよう祈念いたします。

敬 具

二〇一四年十二月二十九日

梅 谷 俊 一 郎

了

(二〇一六年八月二二日)